

停滞は死滅である

——大隈重信の生涯と人間像——

真 辺 将 之

ただいまご紹介にあずかりました真辺将之と申します。このたびは大隈記念館の開館五〇周年まことにおめでとうございます。そのような記念すべき年の大隈祭に呼んでいただけたいことを大変光栄に存じます。私が今回、このような場に呼んでいただくことができたのは、今年の二月に、中央公論新社から『大隈重信―民意と統治の相克―』と題する本を発売したことが理由であろうと思いますが、そのことについて、私はこの佐賀のみなさまにお礼を申し上げなくてはなりません。というのも、この本が誕生するきっかけになったのが、二〇〇九年五月に、やはりこの大隈祭で講演をさせていただきましたことにあるからです。当時私は早稲田大学大学史資料センターの助手という立場で、まだ駆け出しの研究者だったのですが、そのような者に講演という貴重な場を与えていただきました。そこで「大隈重信の文明運動と人生一二五歳説」という講演をさせていただきました、それは後に大学史資料センターの雑誌に論文として発表させていただきましたが、そこから私の大隈研究がスタートし、この本の執筆へとつながっていったのです。ですからこの本は、佐賀から産まれた本だといっても過言ではありません。その意味で、皆様には感謝を申

し上げなくてはならないのです。

しかしながら二〇〇九年からいままで八年の間が空いております。この本を書くのにも、出版社の企画が通ってから五年以上もかかってしまいました。大隈は数えて八五歳まで生きましたから、当時としては長生きです。そして人生が長いだけでなく、政治生命もとても長かったと指摘できます。決して政府の中枢に居続けていたわけでもなく、在野生活が長かったにもかかわらず、これだけの長い期間、政治生命を保つことができたということは、驚異的なことだと思います。板垣退助と比べてみるとよくわかります。板垣の晩年というのは、もうほとんど政治的影響力はありません。自由民権運動の時期には、あれほどのカリスマ性があつたのに、です。しかし政治家としての大隈はとにかく息が長く、一度失脚したと思っても、また這い上がってくるわけです。そんなわけで、大隈の全生涯をまんべんなく書こうと考えた結果、ページ数が多くなり、このように五〇〇ページもある大部のものになってしまったのです。出版社の方も、分厚い本は売れないからと大変困っておりました。脚注のフォントを小さくするなど工夫してかなり出版社の方にも配慮していただいたのですが、結局は三万字以上を削ることになりました。ただ、出版社の方もたいへんに頑張ってくださいまして、五〇〇ページもあるのに、価格は二二〇〇円＋税です。つまり全ページをコピーするよりも安いわけです。そのようなわけで、ぜひ購入して、お手にとっていただければ幸いですと思っております(笑)。

さて、そのような形で執筆したこの本ですが、どこが新しいのかということも、今日は特にお話しさせていただきますと思います。これまでも大隈に関する評伝はいくつも出ています。しかし、これまでに出版された多くの評伝は、明治一四年の政変と立憲改進黨の結成までに記述の多くを割いており、それ以降は、外務大臣としての条約改正交渉あたりまでは触れても、議会開設後の政党活動など、その後半生については記述が薄いという特色がありました。大隈の政治生命が長いこともあって、とてもじゃないけれども、全部は書ききれない、ということがその背景にはあつたと

思います。

けれども本書では、その後半生の大隈の政党活動についても多くを記述することで、大隈という人間がどのように政治姿勢を変化させてきたか、ということを明らかにすることができたと考えております。これまで、大隈については、「民衆政治家」、つまり、民衆の味方であり、民衆の人気の高い政治家としての評価が独り歩きしている感がありました。が、本書で扱いましたように、実際に大隈の政党活動を検討してみると、議会開設から十数年の間、とにかく選挙で勝てず、野党あるいは第二党としての時期が続いていることがわかります。その前提には、明治初期の、民意をほとんど意に介さない大隈の姿がありました。最終的に爆弾を投げられ右脚を失うことになった条約改正交渉などはその際たるものでしょう。民間の世論も政府内部の批判も顧みることなく、条約改正断行で突っ走った結果として、爆弾と、第一回総選挙での大敗がありました。ですから「民衆政治家」としての大隈イメージというのは、いわば最晩年の大隈の姿が前半生に投影されたものであって、明治前期の大隈の活動をその視点で見ようとすると、どうしてもそのイメージに合わない部分が出てきます。本書では、そうした明治前期から、明治末・大正期に至るまでの、長い期間にわたる政治活動を全般的に扱うことで、大隈の政治姿勢の変化の過程、「民衆政治家」誕生の過程を跡付けることができたと考えております。以下、それが具体的にどうということなのか、ということの説明していきたいと思えます。

一、参議としての大隈

大隈は幕末に佐賀藩士としてさまざまな活動を行っていますけれども、必ずしも政治的に名が知れた存在ではあり

ませんでした。しかし、明治維新後の一〜二年ほどの間に、あれよあれよと頭角を現し、政治のトップに近いところまで上り詰めることとなります。そのきつかけとなったのは、イギリスの公使パークスとのキリスト教政策をめぐる交渉で、理路整然と彼を論破したことでした。そしてその後、財政担当者としても貨幣価値の安定に寄与したことなど、その能力を高く買われて、若手の俊秀として参議に任命されるに至ります。

この頃の大隈は、中央集権的国家の確立を至上命題として活動していました。「種々の改革を要求し、殆んど脅迫を以て其の遂行を促すこと屢次」(円城寺清『大隈伯昔日譚』、立憲改進党報局、一八九五年)と自らのちに回想していますが、中央集権的近代国家の確立こそがこの頃の大隈にとつての至上命題でした。明治維新後、地方の民衆の間では、御一新で税金が安くなるのではないかと期待もあり、実際に年貢半減の布令が出された地域もあるのですが、大隈はそうした減税の布令をまかりならぬとして無効にしました。またたとえば大隈の功績として、鉄道敷設の断行が語られることが多いのですが、これもその提案当時は政府内外を問わず反対する意見がほとんどで、「伊藤〔博文〕、大隈二氏がほとんど専断」(前島密『帝国鉄道の起源』、木下立安編『拾年記念 日本の鉄道論』上、鉄道時報局、一九〇九年)で行ったものだといわれています。その結果、弾正台という、政府の不正をただす役所から、「かつり 朝廷ヲ奉欺ニハ有之間敷哉」(国立公文書館所蔵『記録材料 建白部類 弾正台』)、つまり国内の民衆が貧しい状態に苦しみ、列強が進出してきている危機的状況のなかで、多くの費用をかけて鉄道を敷設するなどんでもないことであり、政府は一部の不正な官吏によって騙されているのではないかと批判され弾劾されているのです。なお鉄道建設に際して政府に寄せられた意見書も、一通を除いてすべて鉄道敷設に反対だったといえます。しかし大隈と伊藤は、そうした「民意」を無視して、独断で事を進めてしまったわけです。

また一八六九(明治二)年二月に甲斐国で一揆が起きた際には、「暴を以て抗するものあらは飽迄鎮圧を加へ不得

止は千人迄は殺すも咎めさるへし」(塩谷良翰『回顧録』、塩谷恒太郎、一九一八年)という指示を出しています。千人までは殺してよいなどという指示をしていたとは、後世の民衆の味方といわれた大隈からは考えられない姿ではないでしょうか。

もともと大隈は、さきほど述べましたように、外交における論戦で注目され、その後財政能力を高く買われて政府のトップに躍り出た人物です。ですから、とにかく頭が切れたのです。木戸孝允などは、「大隈之才也氣也義弘、村正之如名劍候」(二八七〇(明治三年八月一七日付伊藤博文宛木戸孝允書翰、伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』四、塙書房、一九七六年)と、名刀のように切れ味の鋭い才気を持つ人物だというように評価しています。このように鋭い頭脳を持つ大隈ですから、周りが馬鹿に見えて仕方なかったのだと思います。馬鹿の話聞いてもしようがない、とにかく近代化ということがどんなに日本の利益になるのか、話してもわからない奴らなのだから、そんな意見を気にせずどんどん事を進めてしまおう、馬鹿なことを言い続けて抵抗するような奴は容赦しない、そんな人物であったわけです。

そのようなこの頃の大隈の性格をよく示す手紙があります。大隈の友人であった五代友厚が大隈に宛てた手紙です。従来この手紙は一八七二(明治五年)のものだとされており、近年早稲田大学大学史資料センターが編集した『大隈重信関係文書』(みすず書房刊)では年代不明とされているのですが、今回私はこの著書のなかで、それを一八七九(明治二二年)初頭のものだと推定しました。この時、大隈は当時数え歳で四二歳、満年齢でいえば四一歳でした。この手紙のなかで五代は、大隈に、あなたの性格にはちよつと問題がある、これでは人の上に立つ人物として問題だ、だから、以下の五ヶ条をよく守ってほしいと、五ヶ条の忠告書を与えているんですね。ちよつと内容を見てみましょう。

第一条

愚説愚論を聞くことに能く堪へし。

一を聞て十を知るは、今閣下賢明に過るの短欠なり。

第二条

己と地位を不同る者、閣下の見と其論説する処五十歩百歩なる時は、必ず人の論を賞て是を採用すへし。

人の論を賞し人の説を採らざる時は、今閣下の徳を弘る不能、即賢明に過ると謂はざるを得ず。

第三条

怒気怒声を発するは其徳望を失する原由也。

怒気怒声を発るに一の益あるを聞かず、譬ば奏任は奏任至当の才脳より保ちえず、等外は等外的当の才より収る不能。今閣下高明其之しか謂ふ処為す処意に不的は云を不待。其才能智識の閣下に不及を知て怒気怒声を発するは閣下高明の欠と謂ざるを得ず。

第四条

事務を裁断する、其勢の極に迫るを待て之を決すへし。

井上云々の如を指す。

第五条

己其人を忌む時は其人も亦己を忌むへし。故に己の不欲人に勉て交際を弘められん事を希望す。

柳原、河野の如きも真の厚意を表て是を御て用られんことを乞ふ

(大隈重信宛五代友厚書翰、早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』五、みすず書房、二〇〇九年)

これを読むと、当時の大隈がどんな人だったかよくわかるでしょう。この五代の忠告の逆のことをやっていたとい

うことです。第一条を読むと、大隈が、相手の話が愚論愚説だと思うともう話を聞かない、一を聞いて十を知るという体で、話のはじめだけきいてダメだと思うと、もういい、となっていたのだと推測できます。また第三条を見ると、大隈がすぐに怒る人物だったということもわかります。後年、大隈は怒ったところをみたことがないといわれるほど穏やかな人物になりますが、この頃の大隈は、近代化を急ぐあまりに、それを理解しない人たちに苛ついていたのかもしれない。第二条や第四条からは独断専行型だったこの頃の大隈の性格がうかがえますし、第五条からは他人に対する好き嫌いが激しかったこともうかがえます。

二、明治一四年の政変の位置づけ

以上、明治初年の大隈が決して「民衆政治家」と呼べるような存在ではなく、鋭い論法と豊かな能力をもとに、ずばずばと物事を進めていく、独断専行型の人物であったということとを述べてきました。それでは、大隈が「民衆政治家」へと転換したのはいつのことなのでしょう？

これについて、従来は明治一四年の政変のきっかけとなったいわゆる「憲法意見書」が、大隈の変化の現れだとみる説が多かったように思います。この憲法意見書で、大隈は大変急進的な議会開設の意見を主張したのです。これをもって、大隈が民権派の理念に賛同したものだとする歴史学者は多く、ここが「民衆政治家」大隈の出発点だと考えている人も多いように思います。著名な政治史家のなかには、この憲法意見書は、伊藤に対して対抗心を持つ大隈が、自由民権運動への迎合、ないしは、民権派との結託を行って、伊藤博文を出し抜こうとしたものだ、などと主張していたりする人もいます。さらに、一部の高校教科書のなかには、この憲法意見書や一四年政変をそうした伊藤への個

人的な対抗心だったというように矮小化して描こうとするものもあつたりします。しかし、私の書いた本ではそういう見方を取っていません。大隈が議会の即時開設を主張したのは、彼が民権派に賛同したから、あるいは伊藤に対抗しようとしたからだったのでしょうか。

私の見立てではそうではありません。大隈が立憲政体を施行可能と考えた背景には、当時、大隈の下に、多くの俊秀が若手官僚として集まってきたことがありました。その多くは福沢諭吉の慶応義塾出身者でした。早稲田と慶応はライバルだといわれますが、その創設者である大隈と福沢は非常に仲が良かったのです。そして明治一〇年前後から、福沢は自らの門下生を大隈の下に送り込むとともに、大隈の財政政策へも、自らの著作で賛意を示すなどして、協力していくようになります。

その福沢は、「往々茶話の端にも世上に所謂駄民権論の愚を嘲り」「今の新聞なり演説なり唯民心を煽動して社会の安寧を妨るの具たるに過ぎず」（福沢諭吉『明治辛巳記事』、慶応義塾編『福沢諭吉全集』二一〇、岩波書店、一九六五年）と、在野の民権運動を、冷やかな眼差しで見っていました。だからこそ、民権運動を推進する側にはなく、政府に人材を送り込んだのです。そしてこの見方は大隈も同じだったと思います。当時、政府部内において、大隈と、伊藤博文、井上馨は進歩派として協力して施政にあたっていました。彼ら三人は、在野の民権運動が盛り上がりつついくなかで、政府としても憲法を制定して議會を開設する方向に舵を切らなければならぬと考えようになっていきます。大隈にしてみれば、それを担いうる若手の俊秀が育っていると考えていました。そこで大隈・伊藤・井上の三人は、福沢諭吉にそのための世論誘導のための新聞発行を依頼します。この三人から議會開設の決意を聞いた福沢諭吉は驚くとともに感動し、「この勢を以て国会を開き、其これを開きたるときには必ず今の政府の人をして多数を得せしめん、〔中略〕兎に角に今の政府は人才の集る所、人望の属する所なれば、我輩は之に応援して穩に内の政權を維持して外

に向て大に国権を皇張すること」(福沢諭吉「明治辛巳紀事」と、大隈ら三人に協力しようと決意します。

大隈の憲法意見書はこうしたなかで提出されたものでした(一八八一(明治一四)年三月提出)。その内容は、二年後に憲法制定を、そして三年後には議会の開設をしようという、きわめて急進的なものでした。この意見書が、先ほど述べましたように、大隈が民権派と結託したものだと言われたりするのは、私にはそうではないと考えます。その一つのヒントは、この意見書のなかで大隈が、憲法は「欽定憲法」で制定されなくてはならないと主張していたことにあります。つまり、当時世間では、憲法起草に民間の人々の意見も組み込むべきだという「国約憲法論」というものが盛んに説かれていました。しかし大隈はそれを否定しているのです。要するに、憲法制定過程から民権派を排除しようという意見であるわけです。そして、二年で憲法制定、三年で議会開設という急進的な意見は、民権派の準備の期間を奪うことよつて、立憲政体のイニシアティブを握ろうという算段であつたと考えられるのです。そのことを、大隈は岩倉具視に宛てた書翰のなかで、「時勢今日二迫り姑息ノ法ハ行ハレズ譬へハ門ノ片扉ヲ開ケハ一時二群入スル如シ寧口両扉ヲ開キ内ハ百官有司一途ニ力ヲ尽クシ外国会家(在野の民権派)ニ先達テ国憲ヲ実行セラ、ヲ今日ノ適當トスル」(岩倉具視「座右日歴覚書」、日本史籍協会編『岩倉具視関係文書』一、東京大学出版会、一九六八年)というように明確に述べています。民権派に先んじて優れた憲法、優れた政治綱領を出すことで、政府内進歩派が立憲政治の主導権を握り、穩健かつ進歩的な政治を行つていこうと考えたのです。

なおもしかしたら、以上のような大隈の、民権派に先手を打つて議会を開設するという方策を突拍子もないものだと考える方もいらつしやるかもしれません。しかし、例えば、保守的な立場の元田永孚もまた、一八七九(明治二二)年の段階で、民権論に先立ち、「天皇親裁」を旨とする国憲と国会を即時開設することを主張、それによつて有司專制を批判する民権運動を鎮静化しようという意見を主張しておりました(元田永孚の憲政意見書、渡辺幾治郎編『日本

憲政基礎資料」、議政政治社、一九三四年。また荏部直「利欲世界」と「公共の政」、『歴史という皮膚』、岩波書店、二〇一一年。および、池田勇太「元田永孚の「自由自主」論」、『維新変革と儒教的理想主義』、東京大学出版会、二〇一三年、を参照。もちろん、元田が主張する憲法や議会の内容は大隈の想定していたものとは大きく異なっており、かなり保守的なものではあったのですが、それでもなお、即時議会開設によつて民権派の政府批判を鎮静化させようと考えていたわけです。また明治一四年の政変の結果として、一〇年後に国会を開設するという詔勅が下されますが、一〇年後の開設というこの詔勅ですら、政府が国会を開設しないという前提での批判を原動力としていた民権運動の側に非常な衝撃を与え、運動の方向性の変更を余儀なくさせたことが近年の研究で指摘されています（松沢裕作『自由民権運動』、岩波書店、二〇一六年）。そう考えてくると、大隈の、断然たる憲法と議会の開設によつて、民権派の先手を打ち、立憲政治の主導権を政府部内進歩派が握るという算段は、もし実現されれば、実際にそのような効果を発し得たのではないかと私は考えます。

ところが大きな問題は、大隈がこの意見書の内容を伊藤や井上に事前に相談していなかったということです。長州出身の伊藤や井上は、政府内における薩長の融和を重視していました。当時薩摩出身の政治家をはじめ、政府中には保守的な政治家が多く、議会開設にあまり乗り気でない人がたくさんいました。そうしたなかで、いかにして立憲政治に軟着陸させるかということ伊藤・井上は一生懸命模索していたわけです。しかし、大隈意見書のような急進的な意見が、何の根回しもなく突然出てくれば、間違いなく保守派を刺激します。そうなれば政府分裂の危機が生じかねません。保守派の中には、大隈らの議会開設の考えを危険だとか、民権派と結託したものだとか攻撃するものも出てくるかもしれません。いや、実際にそうしたことが起こりました。

こうしたなかで、特に大きな役割を果たしたのが井上毅という官僚でした。井上毅は、岩倉や伊藤の下を訪れて、

この大隈意見書の内容がいかに危険なものかと説いて回りました。つまり、イギリスの立憲制は、君主の権力を実質的に空洞化させるようなものであり、大隈意見書はそのイギリス式のもので、おそらくは、福沢諭吉の入れ知恵によるものに違いない、と不安をあおって、岩倉や伊藤を反大隈の立場に誘導しようとしたわけです。そして実際に岩倉も伊藤も、この説得によって大隈意見書の「危険性」に気付き、特に伊藤は、もう大隈とは一緒に働けないとまで怒りをあらわにするようになるのです。

実際にはこの意見書に福沢個人は関与しておらず、大隈のブレインで慶応出身の矢野文雄が草案をつくったものでした。その矢野文雄は、後年「何も政府を倒さうとか、薩長の人を倒さうとか云ふのではない、〔中略〕其人達を大いに説いて正式な政治を布かせ、漸々に立憲制度に抛らすやうにしよう」と云ふのであつて、薩長の勢力を全然覆へさうと云ふに非ずして、これを矯めて政府の基礎を固めようと云ふにあつた」「なるべく薩長有力者との間柄を円満にして、立憲制度の樹立に便にしたいと思つて居たのである」（矢野文雄「補大隈侯昔日譚」、松枝保二編『大隈侯昔日譚』、報知新聞社出版部、一九二二年）と回想しています。この回想は、すでに大隈に薩長藩閥と闘つた「民衆政治家」としてのイメージが付与され、また元老ら「非立憲的」な勢力に対する非難も高まつている時期の回想ですから、大隈や自己を讃える意図ならば、むしろ薩長との対決姿勢を強調した方が適切であつたに違いないわけです。にもかかわらずこうした回想を残していることには信憑性があるように私は思います。また矢野と並ぶ大隈のブレインであつた小野梓も、「或は閣下と伊藤参議とを離間せんとする悪漢有之哉に承候得ば、此辺は兼て御戒心被游度」（二八八一（明治一四）年九月二九日付大隈重信宛小野梓書翰、早稲田大学大学史編集所編『小野梓全集』五、早稲田大学出版部、一九八二年）、「在廷官吏の錯々たるもの及び在野負望の士にして其影響を内閣の議に及ぼすに足るべきもの」に「賛成者」を求めるときで、「白面の書生、軽薄の者流にして所謂筆舌の愉快を一時に取るもの」に求めてはならないと論じていま

す（小野梓「若我自当」、早稲田大学学術編纂所編『小野梓全集』三、早稲田大学出版部、一九八〇年）。この小野の手紙からは、小野が、大隈と伊藤博文とが政治的に協同すべきだと考えていたことがわかりますし、また民権運動に付和雷同する人々を大隈周辺の人々がどのように見ていたかをよく示しているように思います。一部の知識人は別として、民権運動に付和雷同する人々の多くは、政府反対そのものが目的となっており、国会開設はその政府攻撃の手段になっている、いざ国会で何を実際に行うかなんてことは考えられるような人々ではない、だからこそ、政府が率先して与党を形成し為政の任に当たるべきだというのが、大隈らの見方であったと私は考えます。つまり大隈にとって、伊藤は政府内進歩派として、将来の与党を率いていく同志だと考えられていたのであり、決して伊藤を出し抜こうというなどという意図はなかったわけです。それは矢野や小野の文章から明らかだと思います。

そもそもこの意見書は、大隈の側から進んで出したわけではありません。ほかの参議が意見書を出すなかで、大隈だけはなかなか意見書を出さないのので、督促されて仕方なく提出したものです。大隈は、自らの意見が急進的なものであることは理解しており、書面でそれを提出することで保守派の誤解を呼ぶことをおそれ、口頭で説明したいと思っていたのでしょう。だから、他の人にも見せなくてくれと、提出する際にも述べています。この「密奏」という形式も、大隈が伊藤を出し抜こうとしたものとする論拠の一つにされるわけですが、いくらなんでも憲法制定・議会開設という拳が、他の参議に相談もなく実行されるはずもないことはだれでも少し考えればわかることです。むしろ何の根回しもせずにこのような意見書を出したことは、大隈の側にならそうした陰謀がなかったことを示しているようにすら思えます。あくまで保守派の誤解を招くのを防ぎ、あとは閣議の場において口頭で意図を説明すれば何とかなると、軽く大隈は考えていたのでしょう。先述したような、独断専行型で自らの能力と弁舌に自身があつたことも、そう考えた背景にはあつたことと思います。

結局この時は、大隈が事前に伊藤に相談しなかったことを陳謝する形で、いったん事は収まりました。しかしその後、ご存じのように開拓使官有物払い下げ事件というものが起こり、そこで各新聞が政府を激しく攻撃したことから、大隈が政府内部の払い下げ情報を漏らし、三菱・福沢および『東京横浜毎日新聞』を煽動したのだという噂が出てしまい、福沢や民権派と結託して政府を追い落とそうなどと策謀するとは大隈はけしからん奴だ、ということでも、政府を流放されてしまいます。しかし、この時の政府攻撃は、本当に大隈が裏で手をまわしていたものなのでしょうか。私の著書でも、ここには大きな疑問点があると述べて、通説とは違う見方を提示しています。以下それをかいつまんで話したいと思います。

手掛かりになるものとして、一八八一（明治一四）年八月二日付の大隈宛伊藤博文書翰があります。このなかで伊藤は「追々御談合申候開拓使上申之会社設立一条ハ如御承知御聞届相済候」（日本史籍協会叢書編『大隈重信関係文書』四、東京大学出版会、一九八四年）云々と書いているのです。つまり、官有物の払下げについては、大隈が政府内で本当に反対意見を述べたのかどうか、仮に述べたとしてそれはどのような意見だったのか、ということは史料的によくわからないのですが、もし大隈が当初反対意見を述べていたとしても、この手紙の八月二日、つまりこの頃以降各新聞紙による政府攻撃が激しくなってくるわけですが、その八月の上旬段階ではすでに大隈も払い下げについて了承しているということがこの伊藤の手紙の文面からわかるわけです。また払い下げを受ける側として盛んに攻撃されていた五代友厚が、八月二七日、自己に対する攻撃を嘆く書翰を大隈に送っています。その文中には払い下げ対象である岩内炭坑に関して言及され、また五代の事業への大隈の協力の様子も記されていて、少なくともこの両人のレベルで懸隔がなかったことは間違いないのです。

さらに、福沢論吉との関係ですが、福沢論吉は、一八八一（明治一四）年一〇月一日に、大隈宛の書翰で「明治政

府には十四年間この類之事不珍。何ぞ此度に限り而喋々する訳もあるまじ」（慶応義塾編『福沢諭吉書簡集』三、岩波書店、二〇〇一年、一三九頁）と、この払い下げ問題程度のことと騒ぐこともないだろうと書いています。大隈が福沢と結託したという風説が事実無根であることは、この書翰から明らかでしょう。大隈が福沢に攻撃を呼び掛けていたのであれば、こんな文章を福沢が大隈に宛てるはずがありません。なお、大隈が福沢に情報をもらしたとされますが、実際には、福沢は払下げの情報を大隈経由ではなく、五代友厚が経営していた『大阪新報』に筆を執る加藤政之助から、関西在住の門下生を経て入手していることも、残されている書翰からわかります（『福沢諭吉書簡集』三、八七〜八八頁）。当時大隈が、福沢やその門下生に払下げの情報を漏らしたという見方が政府部内では主流であったのですが、事実はそのようではなかったわけです。

ところが問題は、攻撃するほどのことではないと述べていた福沢が、その裏で門下生を動かして反対運動を行っていたという事実です。のちに福沢門下生の矢田續は、福沢の命令によって函館で官有物払下げの反対演説をさせられ、その費用は三菱が出していたと証言しています。福沢という人物は表裏のあるおそろしい人ですね（笑）、大隈にはそしらぬ顔をしていながら、門下生を動かしていたのですから。そして大阪でも福沢門下で『大阪新報』に筆を執っていた加藤政之助が払下げ批判を展開し、八月二〇日には大阪戎座での交詢社臨時演説会で、加藤のほか福沢門下の藤田茂吉、鎌田栄吉、鹿島秀磨らが払下げ批判の演説を行なうなど、福沢が裏で糸を引いていると信じるに足る情勢が形作られていたわけです。これが大隈の足元を掘り崩していくこととなります。

そのうえ、大隈のブレーンである小野梓もまた、この政府批判の盛り上がりを政局に利用しようという考えを持つに至っていました。会計検査院の検査官を派遣して調査を行なうとともに、検査官による払下げ中止建議書の提出を目論んだのです。小野梓は大隈に建言した「若我自当」という意見書の中で、この開拓使官有物払下げ反対は憲法制

定のための「方便」であり、必ずしもこの問題で勝利を得る必要はないと述べています（『小野梓全集』二三）。世論を盛り上げることによって薩長藩閥を追い詰め、憲法制定を認めさせようという算段であったわけです。しかし、逆に、こうした福沢と小野の動きは、大隈を窮地に陥れることになってしまっています。

さらに付言すると、小野は同じ土佐出身の河野敏謙という人物と親しく、河野は機関紙『東京毎日新聞』に拠って開拓使問題で政府を追及している嚶鳴社と深い関係を有していました。このことが、福沢―大隈―小野―河野―在野民権派が結託して政府転覆を謀っていると受け取られることにつながりました。ただし、嚶鳴社と大隈との結託というのは根拠のない憶測にすぎないと私は考えます。明治一四年の政変後に嚶鳴社が立憲改進黨に参加するために、歴史家のなかにもそのように大隈と嚶鳴社との関係を理解している人が多いのですが、政変前に大隈およびその親近者が政治的に接近していたことを示すような、信頼できる史料は実は見当たりません。それどころか、大隈と結託したとされた福沢論吉などに至っては、嚶鳴社の首領格であった沼間守一という人物のことを「小児同様の狡猾者」（『明治辛巳紀事』二三五頁）と呼んでおり、福沢が「駄民権」と呼んで馬鹿にしていた在野民権運動の一人としか考えていなかったように思われます。もちろん、小野梓と河野敏謙が同じ土佐出身ということで親しかったり、矢野文雄が一八七七（明治一〇）年頃から沼間や島田三郎と知り合いであったり（矢野文雄「補大隈侯昔日譚」二三―三三頁）という程度の関係はありますが、それらは個人的な知り合いの域を出るものではなく、政治的に結託していたといえるほどのものであったとみなせる材料はありません。立憲改進黨の結党に参加した市島謙吉の回顧によれば、市島らが小野の紹介で初めて大隈に面会した際、たまたま河野敏謙が大隈邸を訪問したため、小野と進めていた政党結成の謀議が漏れたのではないかと心配したという回顧を残しています（金子宏二編「市島春城自伝資料『憶起録』」、『早稲田大学図書館紀要』五八、二〇一一年三月）、このように政変以前において河野は小野・市島らの政党結成の同志とは考えられておらず、

また小野は市島らに対し「河野は怪しからん」と語って刀を按じたことすらあったといっています（市島謙吉氏談話速記「一二三頁、広瀬順皓編『憲政史編纂会旧蔵政治談話速記録』一、ゆまに書房、一九九八年）。また逆に、嚶鳴社系の人々のなかでも、のちに立憲改進黨に参加する島田三郎などは、反大隈的色彩の強い佐佐木高行の中正党に加入していました。のちに両者が改進黨に合流することから短絡的に考えられやすいのですが、政変以前において、大隈派と嚶鳴社系官僚とが政治的に近い存在と見るのには無理がある、というのが私の見解です。

つまり、この講演の趣旨に立ち返りますと、大隈は憲法意見書においても、開拓使勧誘物払い下げ意見においても、決して民衆や民権派の立場にたつて行動していたわけではありませんでした。伊藤、井上馨ら政府部内の進歩派による与党形成工作こそが、大隈の目指す形であったわけですから。しかし大隈の根回し不在の政治姿勢や、福沢諭吉や小野梓らのそれぞれの動きが、大隈への疑念を招く結果となり、大隈を窮地に陥れることになりました。従来の研究は、大隈の民権派との結託を確証もなく疑った政府要人の側の史料（たとえば佐佐木高行の日記『保古飛呂比』や、伊藤博文、岩倉具視、井上毅の手になる史料などに史料批判することなく依拠していたために、政府側の穿った見方にそのまま乗っかる形で、大隈の意図を読み取ってしまったているのです。しかし、これら史料は、すべて大隈のことを疑い、悪口を言っている人たちの史料です。特に『保古飛呂比』には、出所の怪しい噂話に類するような情報も多いのです。人の悪口を言う時のことを考えてみてください。大抵、悪口を言う人というのは、いかに相手が悪いか、そして自分の言っていることが正しいかを理解してもらおうと、話を大きく盛りますよね。そうやって悪口が伝播していくなかで、独り歩きして、雪だるま式に膨れていくわけです。そんな情報をもとに、大隈の真意をうかがおうとしても、それは無理があるというものでしょう。これは後年の『原敬日記』や、密偵史料などにも言えることです。自党派に關することや、自分で直接見聞きした事柄ならまだしも、政治的に敵対していた党派に関する記述は、よほど注意して

使用しない限り、そこから虚像を掴み取ってしまう結果になりかねないわけです。

この頃の大隈は、一部の急進的な民権派にみられたような、学問的知識に基づかず、反政府それ自体を目的とするような傾向を警戒していました。まだまだ民衆は政治的に成長していないのであり、学問・知識を有するエリート層（福沢門下など）を担い手として立憲政治を運営していくべきだと考えていたのです。それを理解しないと、政変後に、自由党と合同せずに、別の政党（立憲改進黨）を設立した意味も理解できません。民権派の理念に共鳴したのであるなら、自由党に合流して政府に対抗しうる一大勢力を形成した方が合理的です。しかし、そこに飽き足らないものを大隈は感じていたのです。ですから、都市知識人や若手の元官僚を中心にした政党を別につくったわけです。早稲田大学の前身である東京専門学校の設立も、そのことと関係しています。知識・学問を有する人間こそが、立憲政治を担いうるが、現在の国民にはまだまだそうした素養が足りない、だからこそ学校を作ったのです。「右手に政党、左手に学校」と言われますが、政党と学校を同時につくったことには大きな意味があるわけです。

また、大隈が民意に迎合する姿勢を持っていなかったことは、その後、一八八八（明治二一）年二月になって、伊藤内閣（ついで黒田内閣）に外相として入閣し、政府へと復帰したことに示されます。つまりこの外相復帰は、政府進歩派の与党として議会を迎えるという、明治一四年の政変前の状況への復帰を意味していました。そしてその後、外相として進めた条約改正交渉では、政府内外の反対意見の盛り上がりを見無視して改正を強行しようとし、その結果爆弾を投げられて右脚を失うこととなります。もし明治一四年の政変の前後に大隈の姿勢が変化したと考えると、自由党と別に立憲改進黨を結成したことや、外相として政府に復帰したこと、さらに条約改正交渉での民意無視の姿勢などは、説明することができないのです。このあたりをいかに統一的に、大隈の内面に沿って理解するかということ、私の著書では強く意識しました。その結果、従来とは違う大隈像が見えてきたわけです。議会開設前の大隈は、

明らかにエリート主義、エリートによる独走をよしとする主義であったのです。

三、議會開設後の大隈の自己変革

世論の大反対を無視して条約改正を強行しようとした大隈は、痛いしつぺ返しを食らうことになります。つまり、条約改正交渉の翌年に行われた第一回の総選挙で、総議席の六分の一以下、自由党の議席に比べても三分の一以下という、当初の予想よりも相当に少ない議席しか獲得できなかったのです。これより先、政府部内でも反対意見の出た条約改正交渉を強行したこともあって、長州の人々との折り合いも悪くなり、外相を結局辞任することになりましたので、当初の、与党として議會開設を迎えるという構想は水泡に帰すことになります。

議會が開設されたにもかかわらず、そこで少数議席しか取れなかった、この事実が大隈に「民意」を得ることの重要性を認識させることになりました。ここから、大隈の自己変革が始まっていくことになります。そのひとつのあらわれが、その後、大隈が自ら民衆の前へと出ていくことが多くなっていくことです。もともと、大隈は弁舌は得意でありましたが、それは対面でのディベートの類に秀でていたということであって、大勢を前にしての演説などは得意ではなく、議會開設以前においては遊説活動もほとんど行っていません。一八八二（明治一五）年四月一六日の立憲改進黨結党式でも、大隈は挨拶を述べるのみで、改進黨の主張については一切を語らず、その挨拶の様子について横山健堂は「態度、太だ揚らず。今日より見れば、全く、別人の如し。〔中略〕彼が、弁論を事とするに至りし動機は、之を彼より聞かざれども、事實は、日清戦役の後に在り」（横山健堂『伯大隈』、実業之日本社、一九一五年）と証言しています。地方を回つての遊説活動ということも行っていないませんし、それは、議會開設前において、大隈と並ぶ

政党指導者であった板垣退助が全国各地で精力的に演説活動を行なっていたことと比べると、非常に対照的でありました。

しかし、議会開設、つまり改進黨が「民党」としての姿勢を明確化する一八九〇年代以降、しだいに大隈は、民衆に語りかけ、民衆の意図を積極的に汲んでいくという方法へと転換していきます。そして得意ではなかった演説を積極的に行うようになっていくのです。もちろん、最初は必ずしもうまくいったわけではなかったようです。しかし大隈はその後、多くの場数をこなしていくことによって、次第にその弁舌力を向上させ、演説・講話に活かすことができるようになっていきます。「伯の談論は、恰も美目の如く、古酒の如く、終に人を酔はしめずんばあらざる也」「恰も図書館の精霊が、マーチの曲につれて、伯の舌頭より躍り出づるかの感を人に与ふ」（『伯大隈』）と評された談論や演説は、新聞紙上でもしばしば報じられ、大隈の名声と人気を高めていくことにつながりました。徳富蘇峰もまた「談論の雄としては、予が接した限りに於て、大隈以上の者はあるまいと思ふ」（徳富猪一郎『我が交遊録』、中央公論社、一九三八年）と語っています。

またその過程で人格もだんだん穏やかになっていったようです。五代友厚の手紙での忠告からもわかるように、かつての大隈は舌鋒鋭く人を斬るような人間であったわけですが。一八八二（明治一五）年春に初めて大隈重信に会った高田早苗はその時の大隈の様子を「一見した処一寸近よりたい一大人物と見えたと同時に、何処となしに親みがない峻烈の感じがした」と述べており、かつ他の人からも「平生寡言で、一旦議論となると人の心胆を寒からしむる様な強烈な調子で以て、対手を説伏せずには置かなかつた人であった」と聞いたと述べています（高田早苗『半峰昔ばなし』、早稲田大学出版部、一九二七年）。しかし、その後大隈は、次第に円満な人格となつていき、人の話をよく聞き、明るく、親しみやすい人格へと変化を遂げていくこととなります。これはひとつには大隈自身の努力もあったでしょう

う。しかしそれだけでなく、大隈が年齢を重ね、五〇代六〇代となることで、人格に円熟味を増していったという面もあつたらうと思います。

こうやって、民衆の前に出て、民衆に語りかける、円満な人間へと大隈は変貌していきました。ここから「民衆政治家」としての大隈がスタートするわけです。しかし、ここで注意しなくてはならないことは、民意と向き合うということは、民意に迎合するということとは違う、ということなのです。大隈は民衆に向き合うようになっていきましたが、しかし決して、民意に迎合したわけではありません。大隈は同時に民衆に対して厳しい批判をしばしば行い、民衆の成長が必要だと常に主張していたのです。たとえば、次のような意見を見てください。

人間は感情的動物などといふが、感情的動物だとて感情にのみ走つては行けない。何としても理性が必要である。感情が理性に本いてこそ其処で処世上に大した過失もなく正しい道を進める事が出来る。何か一寸した事件に遭遇しても忽ち非常に憤激し、非常に熱烈になり、為めに前後の思慮を失ふに至るといふ様な事がなくなる。左様いふ際には常に賢者識者の指導に依つて動く。即ち賢者識者が常に輿論を指導して行くのである。我輩は常に政治家は輿論を指導せざるべからずといふが、それは何を意味とするかといふに、つまり、国民の感情を理性に導く事である。是に因つて社会に秩序が立つ。此に於て国民の共同生活の上に規律が立つのである（『大正時代の三大革新（其二）社会的革新論』、『新日本』三・七、一九一三年七月）

民意というものは、ともすれば感情に動かされてしまいがちであるわけですが、それを大隈は強く戒めています。大隈は民衆に全幅の信頼を置いていたわけではなく、むしろ政治家や学者といったエリート層が、国民を指導する、世論を指導するということが常に必要であると主張していました。もちろんその一方で、世論の側は、選挙という手段で政治家を選び、監視するわけですから、一方的な指導ではありません。が、大隈は当時における民衆の知的な状況を決して良しとはしていませんでした。やはり国民には勉強が足りないことがある、もつと勉強をなさい、と国

民にしばしば呼びかけていますし、この国民を教育する教育制度の必要性、特に政治教育の不備ということをしばしば訴えてもいます。

他にも、「どうせ無邪気の国民は政治上の思想は乏しいものである、どうしても指導者が之を教育し指導して立憲的国民を拵へなければ真の立憲政治は行はれないのである」(「大隈総理の演説」、『憲政本党党報』八、一九〇七年二月)というような発言も行っています。国民をかなり見下した見方じゃないか、なんて思われる方もいるかもしれません。この発言は、一九〇七(明治四〇)年、大隈が憲政本党という政党の党首を辞任した時の演説での言葉です。この頃、憲政本党はなかなか選挙で勝てず、長い間野党の座に甘んじなくてはならなかったのですが、腐敗した立憲政友会を国民が選び続けている、ということへの苛立ちがあったのだと思います。

しかし、こう述べたからといって、大隈は決して民衆から顔を背けたわけではありません。大隈が党首を辞任した背景には、大隈が常に民衆の側を向き、薩長の元老たちと手を組もうとしないうことへの、議員からの反発が理由でありました。つまり、政友会が利益誘導で民衆を誘惑しているなか、正論ばかり吐く大隈が煙たくなったのです。選挙で勝てないなか、与党になり力を握るためには、藩閥と手を組むしかない、という考えの人たちが党幹部に増えていき、そうした党幹部は、藩閥と手を組むためには大隈が邪魔だと考えたわけです。しかし、そうした人々に対して大隈は、「諸君は国民の代表者である」「我々の地位は決して今日権力によつて成立つものではない、国民の意志に依つて成立つものである、我々の土台が国民である、将来我々の立脚地は国民である、然らば国民の輿望を収むるや否やと云ふことは最も大いなる問題である、徒づらに多数を頼んで、強を頼んで私を営むと云ふ訳ではない、強を頼んで政權に近づくといふ訳のものでもない」(前掲「大隈総理の演説」というように、厳しく戒めの言葉を述べて釘を差しながら、党首の座を降りました。政党政治家たるもの、決して国民の代表であることを忘れてはいけないうと、藩閥との接近を

もくろむ党幹部を批判したのです。

つまり、民衆の現状に対して厳しい意見を述べていたのは、民衆の側を向き、民衆の立場に立つて物を考えていたからこそであったのです。ちなみに、この時に政党の座を事実上追われることになったことは、結果的には、のちに第二次大隈内閣の組閣につながるようになります。つまり、政党党首の座を下りた大隈は、以後、文化的な活動を精力的に行うことによって、民衆から絶大な人気を獲得していくことになるのです。この文化的活動については、かつて二〇〇九年の講演の際に述べましたし（真辺将之「大隈重信の文明運動と人生一二五歳説」、『早稲田大学史記要』四四、二〇一三年二月）、今回刊行しました本のなかにも詳しく書きましたので、そちらをご覧くださいだけばと思います。

四、人間としての大隈の魅力

前述したように、大隈は、民衆の方向を向くと同時に、人格を円満にしていきました。もともと大隈は、楽天的で、常に前を向く前向きな人物でありましたが、そうした前向きな正確に、人格の円満さ、明るさが加わることによって、人々を引き付けるようになっていきます。人生一二五歳説という、とびきり前向きな長寿論も、大隈人気を醸成しました。明るく前向きな人格、ユーモラスな演説、それが大隈の武器でした。

ただ、前向きな性格、明るい性格の人というのは、往々にして自己肯定感が強く、自分が過去に行ってきたことに対する反省の姿勢がなかったりします。しかし、大隈の場合は、前向きで明るい性格は、単なる自己肯定とは無縁でした。大隈の言葉として有名な「停滞は死滅である」ということがあります。これを裏付けるように、大隈は単に前を向くだけでなく、失敗に学び、自己変革を遂げていくことで成長していきました。そのことが「民衆政治家」大

隈を誕生させたことはさきほども述べた通りです。

大隈において、明るく前を向くということは、現実を無視してよい、無為でいてよいということではありませんでした。むしろ逆に、現実立脚し、失敗を直視したうえで、その失敗を踏まえながら、たゆまぬ自己主張を続けることこそが大事だと大隈は考えていたのです。その後には大隈の歴史観があつたように、私は思います。

大隈は歴史というものを非常に重視した人物でした。大隈が行つた演説の多くは、常に現代の諸問題の歴史的淵源を語る部分が多かりの分量を占めています。だいたい四分の三が歴史の話で、そこから問題の淵源を探り、その解決策や、これからどうするべきか、という問題に進んでいく、というのが大隈の演説のパターンです。そうした大隈の歴史好き、その歴史好きの中に垣間見える歴史認識をよくよく窺つていくと、そこに大隈の楽天的で前向きな姿勢の源泉にあるものが見えてきます。たとえば、次の文章は、大隈が幕末の歴史を回想した『大隈伯昔日譚』のなかの一節ですが、そこで大隈は、明治維新の原動力は何か、ということについて次のように述べています。

読者中には、或は此の〔明治維新の〕原動力なるものは単に水戸、越前、或は薩長土肥、或は更に其の疆域を大にして、幕府に反対したる諸有志の間に存在せるものなり、との推定を為すものあるやも知るべからず。然れども、此の原動力は決して一方にのみ偏存せしものにあらず、幕府は勿論、会津、桑名、庄内、その他奥羽諸藩も亦た、其の原動力を發揮したるものにして、彼の曖昧なすなく、事変の際に首鼠両端を懐くと称せらる、諸藩に至つても、亦た与つて力なきにあらず。〔中略〕其の原動力の赴きし所を察すれば、恰も長江大河の一瀉千里に海に朝するが如きの状ありし。此の河は余多の舟楫を遣るべく、此の水や能く兩岸広濶の田畝を潤すに足る。但し、此の河の斯く利便を与へ、鴻益を奏する源頭は、一二の泉水に止まらず。或は北よりし南よりし、或は清あり或は濁あり、大流細流の鍾り会して、其の水勢は時に溪谷に濫し、時に荒野を蕩し時に岩石を洗ひ、時に停止し時には奔放し、遂に能く其の大且つ深きを成し、其の水の養液を貯蓄し、以て舟楫の便を通し、以て田畝

を養ふを得たるなり。〔中略〕維新の際に志士の為したる一言一句、一事一業は尽く皆な大勢に与りて、其の原動力をして大且つ偉ならしめしなり。徒勞も尚ほ為さざるに勝る。特に、宇宙の真理は人の所為にして徒勞なるものなし。吾人の作業は少くも他山の石と為りて、他の光輝を發せしむるに足るなり。〔大隈伯昔日譚〕

つまり大隈は、尊王派のみならず、佐幕派の言動、さらには日和見をしていた勢力すらも、明治新野の源流のひとつとなり、維新の原動力となつていくのです。佐幕派すら明治維新に貢献したとする大隈の議論は、歴史の大勢のなかでは、あらゆる要素が刺激しあうことによつて、社会を動かす原動力となるのであるという考え方となつており、多事争論のなかにおける公論形成を重視する考え方につながっていました。大隈は、「全体憲法政治は自由の政治である。故に批評の自由も亦盛んにならなければならぬ。その批評の盛んなる中、自から真理が発見せらるゝのである。故に憲法政治とは言論の政治と云ふことである。盛んに言論をしなければ可かぬ」〔新政党に教へ併せて天下の惑を解く〕、『新日本』三・五、一九二三年五月）という言葉を残していますが、大隈は、「真理」の源泉としての、個々人の自由な見解の發露を尊重していました。こうした多事争論の必要の主張は、「人類相集ると利害が異なる、利害が異れば必ず党派と云ふものが起る。それは政府党と反対党で、政府を保護する党派と反対する党派、此二つの党派が無ければ政治は腐敗してしまふのである。反対党が無ければどう云ふ我儘も出来るから専制政治と少しも異なる。憲法の沢は殆ど国民は受けない。」〔日本政党史論〕、早稲田大学編輯部編『大隈伯演説集』、早稲田大学出版部、一九〇七年）と大隈自身述べているように、大隈の二大政党制を是とする議論とも結びついていました。

先ほど述べましたように、大隈は政治姿勢こそ変化しましたが、憲法意見書の提出以降、二大政党による政権交代可能な政党政治の実現という目標だけは、ぶれることなく一貫していました。そうした理念を一貫して持ち続けたの

は、こうした多事争論によってはじめて政治が良い方向に向かつていくのだという信念があったからだとは考えません。

大隈の偉いところは、こうした理念を、ただ建前として唱えるだけでなく、実際にそれに反するような行動を戒めているところです。例えば、地租増徴反対運動での遊説の際、大隈が演説をしている最中に、それに呼応して、増租を主張する憲政党（旧自由党）に対する批判の言に呼応して、「自由党は国賊なり」と叫ぶ声が聴衆のなかから上がりました。この時、その野次を聞いた大隈は、演説をすぐにストップし、「イヤ自由党は国賊ではない、悉く善良なる臣民である」と、その野次をたしなめる発言をしたのです。大隈の演説に聴衆が呼応しての言葉であり、演説が最高潮に盛り上がっているなかでのことです。大隈がそれをたしなめたことは、その盛り上がり水を差すようなことでした。それでも、多事争論こそが政治を良い方向に導くのだという信念を持つ大隈にとって、「問題を勝手に感情の問題に移し且つ危激なる言語を放つて国賊なり破壊党なり」とレッテルを貼ることは決して許されるべきことではなかったのです（関西非増租大会に於ける大隈伯の演説、「天帝国」一・一、一八九九年六月）。近年のネット言論のなかでも、反対勢力に対して「反日」だの「売国奴」だの他国のスパイだのと、レッテルを貼る発言が散見されますが、こうした状況を見たら大隈はきつと、なんだ国民の政治的な力量は一〇〇年経っても全然向上していないじゃないかと、嘆くことでしよう。別の演説でも大隈は「公然団体ヲ組ンデ国民的政治ノ運動ヲナシテ悪イコトハナイ、其力ハ筆ト舌デアル、コレニ反対スル党派ガ出来テ、筆ト口デア互ニ切磋琢磨スル中ニ公論モ輿論モ茲ニ現ハレテ来ルノデア」〔日本ノ政党〕、国家学会編『明治憲政経済史論』、国家学会、一九一九年）と述べています。何が正しいか、誰が正しいかなんてことはあらかじめ決まっていることではない、様々な立場の人、様々な意見の人が議論を戦わせていくなかで、はじめて社会の進むべき道が定まってくるのであると大隈は考えていたのであり、その立場からするならば、

お互いの意見が違うからといって、レッテル貼りをして、発言者自体を貶めるようなことは決してあつてはならなかつたわけです。

明治初期には、自己の才覚に自信があるがゆえに、人の意見を聞かずに独走する傾向を有し、五代の忠告にもあるように、気に食わない人物とは付き合わない、という性格であつた大隈ですが、このような信念の下、後半生においては、自らに異論を唱える者に対して寛容な人物へと変化を遂げていきました。やかましやで知られた田中正造や尾崎行雄を愛し、大隈を憲政本党総理から排斥しようと企てた大石正巳とも、終生交際をやめませんでしたし、元老や政友会に対して厳しく批判する一方で、「全体我輩は敵の無い人間なんだ。人が敵とするかも知れぬも、我輩の眼中には誰とて敵は無いのである。けれども仕方が無い。人が我輩を敵として正面から向つて来れば拠なく相手になつてやる丈の事である」(大隈重信「早稲田大学とカイゼル主義」、『早稲田叢誌』一、一九一九年三月)と自身も述べるように、伊藤博文、井上馨はもちろんのこと、政治的には対立することの多かつた山県有朋や西園寺公望をも常に「友達」と呼び、一個の人間として敵視するようなことはありませんでした。大隈は、どのような相手に対しても、相手を倒すことそのものを目的として活動したことは一度もなかつたと言つてよいでしょう。近代日本の政治家のなかでも、この点においては非常に稀有な存在だと私は考えます。

このこととかわかることですが、大隈は、政治的中立などということが、政治にかかわるものにとつてはあり得ないことだということも強く認識していました。それがよく表れているのが、立憲政友会や憲政会、憲政会の前身の立憲同志会などの諸政党が、「党」ではなく「会」と名乗つたことに対する大隈の批判です。大隈は、彼らが「党」の名を棄て「会」と名乗つたのは、自分たちは党派的でない中立的存在であるかのように装い、藩閥・軍閥に対する批判的精神、言い換えれば権力を監視する役割を自らかなぐり捨てたがためであるとして、次のように批判しています。

権力に反抗する事がそれ程怖いなら初から何故政党運動を起したか。(中略) 政友会の如きは、如何に其議論は宜しくとも、此の如き態度に於て、已に国民的勢力を集中し、藩閥打破、軍閥打破を断行し得る実力有りや否やを疑はしめて来た。独り政友会とのみ言はぬ。桂が政党を組織するに当つても、矢張り政友会の響みに倣つて「元老などの権力者が党を忌む故に」党と言はずして同志会と名け、それが更に今は憲政会となつて来た。加之俗論に媚て皇室中心主義といふ。此様いふ事を言はなければならぬ理由が何処に存在するか。(中略) 何故に一政党の主義綱領中に掲ぐる必要があるか。是は明に保守頑迷の徒に媚びんが為に、近来類に民間に流行し初めたる皇室中心主義なる者の声に迎合したものに相違ない。更に又会といふが、会は貴族院にもあれば、學術其他の集会にも其名称がある。従つて甚だ自由で政社法の拘束よりも免るゝ。此自由を狙ふ所に甚だ思想の貧弱を曝露するものでないか。党でも会でも名称などは構つた事でなしといへばそれ迄だが、併し之れを心理的に觀察すると甚だ面白くない。政党には侃々諤々正を履んで懼れずといふ凛烈なる氣象が無ければならぬ。之を以て国民的勢力を自党に集中し、互に切磋琢磨して国政を監視する、是に於て当局者も我侪が出来ず、能く過を未然に防ぐ事が出来る。(中略) その政党が今却て群衆心理に阿附迎合するとは主客正に転倒したもので、我輩は其存立の意義何処に在るかを知らぬ(「政党復活の機」、『新日本』七・三、一九一七年三月)

本来、政党とは特定の政治的意見を有する集団であり、その意味において中立・公平ということはありません。このが大隈の見解でした。異なる見解による多事論争こそが、政治において大事である以上、政党の「党派性」は、必然かつ必要な要素であるはずであり、とりわけ野党には、権力を厳しく監視し、それと対峙する姿勢が求められるはずだと大隈は考えました。にもかかわらず、政党が、「党」の名称を捨てて中立公平無害な存在であるかのように装い、そのうえさらに国家主義者や保守的な世論に迎合して「皇室中心主義」などということを標榜する。これはまさに、権力と国民との中間にあつて、前者を監視し後者をリードしていくべき政党本来の役割を放棄したものと大隈は批判したのでした。

その批判的精神の必要性という議論とかかわって、先ほどの大隈の歴史認識の話に戻りますと、大隈は、どのような見解を持つものであれ、それは歴史の大勢の一部となっているのであり、歴史に何らかの影響を及ぼす存在なのだと考えていました。ここまで聞いてきた皆さんは既にお分かりかと思いますが、大隈にとつて、自らが歴史の大勢の一部であることを意識するということは、運命のなかで人間の無力を悟ることとは違いました。歴史の大勢を意識することは、自分が何もしくとも歴史が自動的に良い方向に進んでいくことではありません。世の中の状況に逆らつても自らの見解を声高に主張し、行動することこそが、歴史の大勢を動かし、あるべき方向へと世の中を導いていくのだというのが大隈の考えでした。大隈自身は、民意による政治という方向性こそが、歴史の動きゆく方向だと主張していましたが、しかし、誰が正しいか間違っているかなどということは、究極的にはわかりません。人により価値観も異なります。ですから大隈は、自分と考えの異なる相手を「国賊」「非国民」というような言葉で罵ることを戒めたのでした。多事争論、百家争鳴の切磋琢磨のなかで初めて歴史の大勢というものが現れてくるのであり、その過程では失敗することも、自らの意見が間違っていることももちろんあるでしょう。しかし、歴史に「徒勞」はないのであり、とにかく前向きに信じる道に進むことこそが、歴史の大勢の一部分である自分たちの役割であり、責任なのだ大隈は考えていたのでした。

大隈の楽観的な姿勢、前向きな姿勢はこうした歴史観に支えられたものでした。しかし大隈の前向きさ、楽観的性格は、時に政治的な根回しの不在ともなつて現れ、数多くの失敗にもつながったことも事実です。しかし「失敗は元と大成の器を鍛錬する所にして、困難は其の意気を激揚せしむる興奮劑なるのみ。己れの見識の足らざりしを顧みず、其の方法の誤りたる点を問はず唯だ失敗の結果をば挙げて運命の罪に帰せんとするは、運命まさに其の冤に泣くべし」(『大隈伯爵日譚』)と大隈自身言うように、大隈は、歴史の大勢を前にそれを運命とし諦念を抱くのではなく、

常に自己主張を続け、失敗を自己変革の原点とし、前進を続けることこそが大事なのだ、それこそが歴史のなかで生きる自らの使命なのだ」と信じていたのです。

早稲田大学で大隈が初めて演説した際の、「諸君は必ず失敗する」という有名な祝辞があります。ご存じの方も多いことですが、大隈は卒業生たちを前にして、「卒業生諸君は数年勉強の結果、今日此名誉ある得業の証書を貰つて始めて社会に御出になるのは、先づ謂はゞ複雑なる社会に於て百戦奮闘する初陣である、所が中々初陣といふものは余程六ヶしい、どうも諸君が向ふ所には種々の敵が沢山ある、種々の伏兵にも出会ふ、〔中略〕此敵に向つて諸君は必ず失敗をする、随分失敗をする、又成功があるかも知れませぬけれども成功より失敗が多い、失敗に落胆しなされるな、失敗に打勝たなければならぬ、度々失敗するとそれで此大切な経験を得る、其経験に依つて以て成功を期さなければならぬ」〔第十四回得業証書授与式に於て、「早稲田学報」五、一、一八九七年七月〕と喝破したのでした。

卒業生への祝辞といえ、おめでとう、これから君たちには前途洋々の世界が広がっている、というようなことを言うのが普通だと思ひますが、いきなり「諸君は必ず失敗する」などと言われた卒業生たちは、きつとびつくりしたことでしょう。しかし、その失敗を糧とし、そこから自己変革を遂げていかねばならない、と大隈は説いたのです。そしてそのことが歴史の発展にも寄与するのだ、と大隈が考えていたことは、ここで繰り返すまでもないでしょう。

以上述べてきたような、大隈の、自己を絶対視せず、しかしそれでも自己主張を続けていき、間違いがあれば自己改造を続けていくという姿勢、これは、今を生きる私たちにとつても、必要な要素であり、かつ、困難に直面している人々にとつては、勇気を与えてくれる言葉でもあると思ひます。大隈は、常に前向きに学びつけようという意識を持ち続けていました。そしてそうした姿勢自体が、何度も失敗を重ねながら、大隈が結果的には非常に長い政治生命を保ちえることにつながった大きな原因でもあったのです。

以上駆け足で要点のみを話しましたので、わかりにくいところもあったかもしれませんが。もし私の著書『大隈重信―民意と統治の相克』をお読みいただければ、より具体的に、大隈という人物像や、その明治大正政治史・文化史のなかでの位置づけもおわかりになると思います。ご興味を抱かれた方は、ぜひ手に取ってお読みくだされば幸いです。本日は、ご清聴、まことにありがとうございました。

【付記】

本稿は、科学研究費補助金（課題番号二三七二〇三三〇、二二六三七〇八〇二）および早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号二〇一四K一六〇七四、二〇一六K一〇九〇）による研究成果の一部である。